The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「カキ料理は広島が本場だ」構文について
Author(s)	野田, 尚史
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1982, 15, p. 45-66
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56498
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「カキ料理は広島が本場だ」構文について

野田尚史

一　「～は～が……」構文

日本語には「～は～が……」という形式をもつ文がかなり多い。しかし、同じ「～は～が……」という形式であっても、その構造は一様ではない。本稿では、そのなかから「カキ料理は広島が本場だ」型の文を取り上げ、考察を進めて行く。

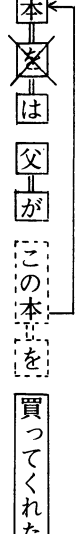
初めに、「カキ料理は広島が本場だ」型の文が「～は～が……」構文のなかでどのような位置を占めるかを明らかにするために、「～は～が……」構文の分類を行なっておきたい。(1)

ここでは、主題である「～は」が、他の成分とどのような論理関係にあるかをもとにして、「～は～が……」構文を①型から⑥型の六つのタイプに分類する。②型は本稿の焦点である「カキ料理は広島が本場だ」型の文を含むので、これをさらに②A型と②B型に下位分類する。

① 「この本は父が買ってくれた」型

このタイプは、「～が」「～を」「～に」「～で」といった格成分が主題化されて「～は」となった結果できた「～は～が……」構文である。図示すると(1)のようになる。

(1)



このタイプに属するのは、次のような文である。(2)は「～が」が主題化された文であり、(3)は「～を」が、(4)は「～に」が主題化された文である。

(2) 「きみは|どんなものが好き？」（五木寛之『ゴキブリの歌』二二六頁）

(3) しかし、五年生以上のギムナジウム課程になると、テストで「5」をとるぐらいのことは|、たいていの子どもが|経験する。（子安美知子『ミュンヘンの中学生』一六八）

(4) ＰＯＵＭに直結する労働組合はなかったので、党員は|ＵＧＴに加入している者が|多かった。（野々山真輝帆『スペイン内戦』五六）

(5)は「～で」が主題化されて「～は」となった文だと考えられる。[2]

(5) 女子二百㍍平泳ぎは|小学六年生の長崎宏子（秋田ＡＣ＝川尻小）が|堂々と優勝した。（『朝日新聞』一九八〇・八・三〇朝一七）

また、格助詞を伴わない、時を表わす成分「今日」「来年」「翌日」などが主題化されて「～は」となった(6)のような文も、この①型に含めることができる。

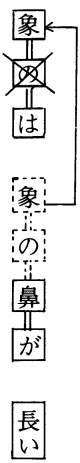
(6)　「当時は検査がなかったし、病院へ行けばお金がかかる。だから、お父さんも行かなかったんだろう」（工藤宜『佐渡にんげん巡礼』六九）

「〜は〜が……」構文は大部分が、各種の連用成分が主題化されてできた「〜は」をもつ、このタイプのものである。

②A「象は鼻が長い」型

これは、(7)に図示するように、格成分内の名詞修飾要素「〜の」が主題化されて「〜は」になった「〜は〜が……」構文である。

(7)



つまり、「象は鼻が長い」は「象の鼻が長い（こと）」という論理関係をもとにして、「象の」の主題化によってできた文なのである。(8)や(9)がこのタイプに属する。

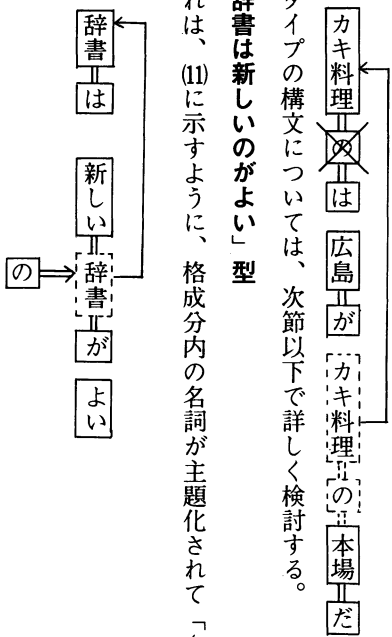
(8)　今の学生は総じて風采がよい。（朝永振一郎『鏡のなかの世界』二）

(9)　憲法判断の回避は、これまでの自衛隊裁判にも、前例がある。（『毎日新聞』一九八一・七・七夕一）

②B「カキ料理は広島が本場だ」型

②Aと同じく、名詞修飾要素「〜の」が主題化された「〜は」をもつ構文である。ただし、②A型の「〜は」は格成分内の「〜の」が主題化されたものであったのに対し、このタイプの「〜は」は述語名詞句内の「〜の」が主題化されたものである。

(10)



このタイプの構文については、次節以下で詳しく検討する。

③「辞書は新しいのがよい」型

これは、(11)に示すように、格成分内の名詞が主題化されて「～は」となった構文である。

(11)

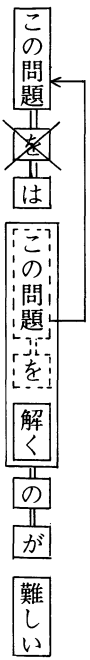
名詞が出て行った後の空所には「の」「もの」「品」などが入る。このタイプに属するものとしては、(12)のような例がある。

(12) トラックはユニセフ（国際児童基金）のものがかなり目につき、しかもその多くが日本製である。（『朝日新聞』一九八〇・一〇・二二朝四「カンボジアの旅」）

④「この問題は解くのが難しい」型

このタイプは、名詞修飾節（あるいは名詞節）内の格成分が主題化されて「～は」となったもので、(13)のような構造をもっている。

(13)



(14)のような例がこのタイプに属する。

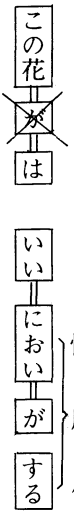
(14)　しかし彼らがどんな数学を知っていたかは、推測することがむつかしい。（遠山啓『数学入門（上）』二）

以上の①型から④型のうち、①型は主文の述語の連用成分（格成分）が主題化された「～は」をもつものであった。それに対し、②型、③型、④型は名詞句内要素が主題化された「～は」をもつという点で一括できる。ということは、「～は～が……」構文の「～は」は、連用成分がもとになっているもの（①型）と、名詞句内要素がもとになっているもの（②型、③型、④型）の二種類に大別されるということである。しかし、このほかに、これら①型から④型の延長線上にありながら、このなかに含めることが困難な構文が存在する。それが⑤型と⑥型である。

⑤「この花はいいにおいがする」型

「～が……」という形の慣用句を含む「～は～が……」構文である。

(15)



この場合、「においがする」の部分の結合が強く、これ全体で一つの述語のような働きをしているため、「この花」は「においがする」全体に対して主格の関係に立つと考えるほかない。

(16)　鼻に吹きこむ風は、石鹸の味がした。（安部公房『砂の女』一四一）

(17)　私は彼女のその時の孤独感がよくわかるような気がした。（野々山真輝帆『スペイン内戦』一九六）

⑥その他

短絡や省略、ねじれなどによって、論理的な格関係に戻せないような「～は～が……」構文もわずかながら存在する。(18)、(19)がその例である。

(18) りっぱな住宅のある、静かな街を歩くのは気分が落ち着く。（松本清張『聞かなかった場所』三六）

(19) この日の空もようは日中、今にも雨が降り出しそうな曇り空が続き、ところによって一時雨となった。（『北国新聞』一九八一・八・七夕七）

以上、「～は～が……」構文の分類を行なってきたが、ここに示したそれぞれのタイプは互いに完全に独立したものではなく、あるタイプと他のタイプが連続している場合も少なくない。ここでは、その連続性をひとつひとつ示す余裕はないが、②B型、つまり「カキ料理は広島が本場だ」型と他の「～は～が……」構文の係わりについては第四節で触れることにする。

二　「カキ料理は広島が本場だ」構文の構造と機能

「～は～が……」構文のうち、②A「象は鼻が長い」型については比較的多くの論考がある。しかし、②B「カキ料理は広島が本場だ」型については、②A型の陰にかくれて、ほとんど顧みられていないのが現状である。[3] 本稿では、以下三節にわたって、この②B型の構文について考察を進めて行く。

②B「カキ料理は広島が本場だ」型の構文は、前節でも触れたように、(20)のような論理関係をもっている。

(20) 広島がカキ料理の本場（であること）

(20)の代わりに(21)という論理関係を設定することも可能かもしれない。

(21)　カキ料理の本場が広島（であること）

(21)を排して(20)を取る根拠は次の二点である。

第一は、(21)の「カキ料理の」を主題化した(22)が不自然であり、実例においても(22)のような文はほとんどないことである。

(22)？カキ料理は本場が広島だ。

また、(21)から問題の「カキ料理は広島が本場だ」を導き出すためには、(23)に示すように、「カキ料理の」を主題化した上で、「本場」と「広島」を入れ換えなければならないが、そうした複雑な操作を必要とする理由は考えられない。

(23)

第二の根拠は、「は」の付加による主題化を受けない、いわゆる陰題の転位文では、(21)をもとにした(24)が不自然であり、実例もほとんどないことである。

(24)？カキ料理の本場が広島だ

実例のほとんどは、(20)と同じ語順をもつ(25)のような文である。(4)

(25)　前記の第一から第三までの規則を、民間機だけでなく自衛隊機についても適用することにした点が、今回の法改正の大きな特色である。（柳田邦男『失速・事故の視角』二九六）

さて、(20)のような基底からは、何を主題として「は」でとりたてるかによって、三通りの文が派生可能である。

(20)　広島がカキ料理の本場（であること）

第一は、述語名詞句全体、(20)で言えば「カキ料理の本場」が主題化される、(26)のような場合である。

(26) カキ料理の本場は広島だ。

この種の主題化は制約も少なく、最も一般的である。

第二は、主格名詞「広島が」が主題化されて、(27)のような文が派生される場合である。

(27) 広島はカキ料理の本場だ。

しかし、この種の主題化には強い制約がある。例えば、(28)から(29)を派生させることは困難である。

(28) 漏電がこの火事の原因（であること）

(29) ?漏電はこの火事の原因だ。

この種の主題化が可能なのは、主格名詞と述語名詞が、措定ではなく指定（identification）の関係にあるときに限られるようである。[5]

第三は、述語名詞句の名詞修飾要素「カキ料理の」が主題化される場合である。

(30) カキ料理は広島が本場だ。

この種の主題化が可能なのは、述語名詞が「特徴」「中心」「原因」「目的」などを表わす場合に限られる。（詳しくは次節参照。）この種の主題化ができない例を挙げてみよう。例えば、(31)の「彼女たちの」を主題化して(32)をつくることは難しい。

(31) 「日本の男性記者はみなさん、お行儀が良くて扱いやすい」というのが、彼女たちの感想だ。（『朝日新聞』一九八一・七・二二夕三「オタワの風」）

(32)?彼女たちは、「日本の男性記者はみなさん、お行儀が良くて扱いやすい」というのが感想だ。

同じように、(33)の「ロッキード社の」を主題化して(34)をつくることも難しい。

(33)経営危機の中で、正常な商行為を越えた無理な販路開拓をして飛躍をする、というのが、ロッキード社の一つのパターンのように見える。（柳田邦男『失速・事故の視角』八四）

(34)?ロッキード社は、経営危機の中で、正常な商行為を越えた無理な販路開拓をして飛躍をする、というのが、一つのパターンのように見える。

「カキ料理は広島が本場だ」タイプの文は、「カキ料理」の部分にとって重要な一側面を、「広島が本場だ」の部分で叙述するという機能をもっている。そのため、述語名詞は、物事の重要な一側面を表わす「特徴」や「中心」のような名詞でなければならない。(32)の「感想」や(34)の「一つのパターン」は「彼女たち」や「ロッキード社」の重要な側面を表わさないので、「カキ料理は広島が本場だ」構文は成立しないのである。

ちなみに、述語名詞句の名詞修飾要素の一部だけが主題化された(35)のような特殊な例も存在する。

(35)うなぎと違ってどじょうは養殖が難しいのが高値の原因。（『日本経済新聞』一九八一・七・五朝九）

この文は(36)が基底になっていると考えられる。

(36)（どじょうの）養殖が難しいのがどじょうの高値の原因（であること）

ここから、述語名詞句全体、つまり「どじょうの高値の原因」を主題化すれば(37)ができ、述語名詞句の名詞修飾要素「どじょうの高値の」を主題化すれば(38)ができる。

(37)どじょうの高値の原因は養殖が難しいことである。

(38) どじょうの高値は養殖が難しいのが原因である。

そして、「うなぎ」との対比の関係で「どじょうの」だけを主題化すれば(35)になるのである。

三　「カキ料理は広島が本場だ」構文の述語名詞

前節で述べたように、「カキ料理は広島が本場だ」タイプの文は、主題である名詞句の重要な一側面を叙述する文であるため、その述語名詞には制約がある。

本節では、このタイプの文に用いられる述語名詞にはどのようなものがあるかを観察して行く。

この構文に用いられる名詞を、便宜上、A群からI群に分類する。

A　「特徴」群
B　「癖」群
C　「中心・代表・標準」群
D　「限度」群
E　「基盤」群
F　「源」群
G　「目的」群
H　時間関係群
I　数量関係群

では、順に、それぞれの群に属する名詞を、それが用いられた実例とともに示して行こう。

A「特徴」群

ここに属するのは「特徴」「特色」「利点」「とりえ」「身上」「欠点」「弱点」といった名詞である。次のような例がある。

(39)　金沢の町は本屋さんが多いのが特徴である。（五木寛之『ゴキブリの歌』二六七）

(40)　……、実はこの車は整備が難点なんだそうです。（深田祐介『新西洋事情』一二一）

「欠点」「難点」は「問題」「課題」につながっていく。

(41)　商社は、じっとしていても惰性でメシが食えるところが問題だ。（『朝日新聞』一九八一・七・四朝八「語録」）

これがさらに「急務」になると形容動詞的になり、「必要」になると完全に形容動詞と見なされるようになる。

(42)　阪急は投手力の整備が、近鉄は猛牛打線の復活が急務。（『毎日新聞』一九八一・七・三朝一七）

その他、「トレードマーク」「ミソ」などもこの群に含めることができる。

B「癖」群

人間のもっている癖や好みなどに関係する名詞「くせ」「口ぐせ」「日課」「好物」「趣味」「特技」「楽しみ」「生きがい」「自慢」などがこの群に属する。次のような例がある。

(43)　Nさんは、オゥ、と小さく叫ぶのがくせで、何かびっくりすると、オゥ、と息をのむような声を出すのだが、……（五木寛之『ゴキブリの歌』一八四）

C「中心・代表・標準」群

「中心」に類する名詞としては、「焦点」「拠点」「本場」「主産地」「ヤマ場」「峠」などがある。

(44) わが国のレモンは、昭和三十九年以前は、広島県を中心とした瀬戸の島々がおもな産地だった。（『朝日新聞』一九八〇・九・二三朝八「村からの報告」）

(45) 坂道は左手に曲がるところが峠だった。（松本清張『聞かなかった場所』三九）

その他、「主流」「本命」「目玉」「専門」「本業」などがあり、さらに「職業」「仕事」「任務」などに続いていく。

(46) この町の「乗って守ろう倉吉線」運動は、町費をつぎ込んでの乗客増対策が目玉だ。（『朝日新聞』一九八一・九・一夕三「ゆうかんレーダー」）

「代表」に類する名詞としては、「会長」「社長」「主人」「主役」「第一人者」「旗頭」などがある。

(47) 「きょう（四日）の官邸は私が主人」（『日本経済新聞』一九八一・七・五朝二「記者手帳」）

「標準」に類する名詞には、「規準」「目安」「定説」「通説」「常識」などがある。

(48) 学校保健法施行規則によると、ウイルス肝炎（第二類）は「主要症状が消退するまで」登校を停止するのがメド。（『朝日新聞』一九八一・八・三〇朝二八「暮らしと健康」）

(49) 滝川事件は政府が戦前の大学と学問に対する弾圧で自由主義的刊法論の滝川教授を狙い打ちにしたところ、他教官らが自然発生的に当局に抵抗したというのが定説。（『毎日新聞』一九八一・七・三朝二三）

また、「基本」「建前」「本音」「スジ」といった名詞もこの群に含めることができよう。

(50) 事実、養護学校の扱い方は生徒を「劣った人間」と見るのが基本だった。（本多勝一『ルポ短篇集』二二九）

(51) しかし、どことも入居者の多くは「いいとこが見つかれば出たい」が本音だ。（『朝日新聞』一九八一・八・

一朝一二「ミスターどよう」）

この群に属する名詞はいずれも「中心的な」「主な」「一番の」「唯一の」「代表的な」「本当の」「標準的な」「基本的な」といった概念を含んだものである。したがって、このような形容詞類を含んだ名詞句もまた「カキ料理は広島が本場だ」構文の述語になることが可能である。

(52)　が、今のカンボジアは、何はともあれ、まずポル・ポト時代の破壊から立ち直ることが最大のテーマなのである。（『毎日新聞』一九八一・七・七夕五）

D「限度」群

「限度」「限界」「上限」といった名詞がここに含まれる。

(53)　金はいまが底値です。（『朝日新聞』一九八一・七・九朝四「金ブーム再燃」）

E「基盤」群

「基盤」のほか「前提」「条件」「根拠」「決め手」「命」などがこの群に属する。

(54)　言論の自由は個々の記者の自由が基盤だ。（『朝日新聞』一九八一・六・一六夕二「特派員メモ」）

F「源」群

この群に属する名詞は大きく二種類に分けられる。一つは「原料」「原型」「原産地」「郷里」「本家」「原点」といった種類の名詞である。

(55)　トウガラシは、メキシコからアンデスが原産地。（『朝日新聞』一九八〇・一〇・一二朝一三）

もう一つは「原因」「一因」「きっかけ」「発端」「動機」「犯人」といった種類の名詞である。

(56) 私が職業作家の道に踏みこんだのは、その新人賞をもらったのがきっかけであるから、いろいろ感慨があった。（五木寛之『ゴキブリの歌』八四）

G「目的」群

ここには「目的」「目標」「ねらい」「目当て」「眼目」などが含まれる。

(57) 「君は何が目的なのだ。高橋千代子を真似て、おれを脅迫し、何をおれから取ろうというのだ。金か？」（松本清張『聞かなかった場所』一五七）

(58) この総合検診は、職場検診などがない自営業者や主婦をカバーするのと、胃がんや肺がん、結核や肝臓病などを早期発見して、医療費の膨張に歯止めをかけるのがねらい。（『朝日新聞』一九八一・六・二七朝二三）

なお、「結果」という名詞は「原因」と対義の関係にあるが、「カキ料理は広島が本場だ」構文の述語にはなりにくい。ある物事が起こったり行なわれたりするとき、「原因」（時間的に前）と「目的」（時間的に後）は、その時点でのその物事の存立にとって重要である。それに対し「結果」は、後になってわかるものであって、その時点ではその物事の存立にとって重要でないため、この構文の述語になりにくいのであろう。「結果」に類した名詞でも「オチ」は、後からわかった結果を表わす語ではなく、その時点に身を置いて結果を予想する表現であるため、この構文の述語になりやすい。

H　時間関係群

ある物事にとっての大事な「時」を表わす「初日」「シュン」「買いどき」「潮どき」「締め切り（日）」といった名詞も「カキ料理は広島が本場だ」構文の述語になる。(59)もこの種の文と見ることができる。

(59) 大阪の夏祭りのクライマックス大阪天満宮（北区天神橋二丁目）の天神祭は二十四日が宵宮。（『朝日新聞』一九八〇・七・二五朝二二）

I　数量関係群

「ほとんど」「大半」「多数」「八割」「半分」といった数量を表わす語もこの構文の述語として使われる。

(60) 日当は一〇〇〇円クラスがほとんどである。（本多勝一『ルポ短篇集』二一六）

この群の語が述語に使われた「AはBがXだ」構文は、「B」と「X」を入れ換えて「AはXがBだ」にすることが可能である。例えば、(60)の「一〇〇〇円クラス」と「ほとんど」を入れ換えた(61)も完全に自然な文である。(6)

(61) 日当はほとんどが一〇〇〇円クラスである。

以上、「カキ料理は広島が本場だ」型の構文に用いられる名詞述語を便宜的にA群からI群に分けて見てきたが、これらの各群は互いに重なり合いながら連続しているものである。ここに挙げたすべての名詞に共通する点を一言で言えば、それは、「ある物事の重要な一側面を表わす語」ということであろう。

四　「カキ料理は広島が本場だ」構文の周辺

前節で観察した「カキ料理は広島が本場だ」構文の周辺には、この構文とは言い切れないが、これに非常に近いと考えられる文があり、それがさらに他の構文へとつながっている。

本節では、そのようなありさまを、四つの方向から眺めてみたい。

①「カキ料理は広島が本場になっている」への方向

「だ」系統のかわりに「に（と）なる」が用いられた次のような例が見られる。

(62) がんのざっと八割は、何らかの形で食べ物が原因になっている。（『朝日新聞』一九八一・六・二八朝二二「がんとの対決」）

(63) 米国にとって歴史的な失敗となったベトナム戦争介入は、南シナ海上に第七艦隊を繰り出し、ベトナム軍と交戦したトンキン湾事件が大きなきっかけとなった。（『朝日新聞』一九八一・八・二一朝五「社説」）

これらの「に（と）なる」は「だ」系統の語に置き換えてもほとんど意味がかわらない。こうした文も「カキ料理は広島が本場だ」構文の一種と考えることもできよう。ただ、「〜に」「〜と」を格成分と考えれば、第一節の分類上は②A「象は鼻が長い」型に属することになる。いずれにしても、この種の文は「カキ料理は広島が本場だ」構文の周辺（あるいは周囲）に位置するものである。

このように、中心部に「AはBが特徴だ」のような文があり、その外側に「AはBが特徴になっている」があるとすると、そのさらに外側には「AはBに特徴がある」という形の構文がある。

(64) バケツの中の水は一つ一つが離れていないで、一つにつながっている点に特色がある。（遠山啓『数学入門（上）』二四）

こうなると、もう②A「象は鼻が長い」型の文と見なされる。

また、これと同じ内容を表わすのに「AはBを特徴とする」という形の文も用いられる。

(65) 民主政治は政権の交代を前提としている。（『朝日新聞』一九八〇・八・三〇朝四）

(65)の「民主政治は」は「民主政治が」が主題化されたもので、この文は「〜は〜が……」構文でもない。

しかし、「AはBが特徴になっている」も「AはBに特徴がある」も「AはBを特徴とする」も意味するところは同じである。それは、これらの「なる」「ある」「する」がほとんど意味をもたない「形式動詞」と呼んでもよいものだからである。

これらの「形式動詞」は、固有の動作・状態を表わす機能を失って、格の指定を担当するだけになっている。「AはBが特徴となっている」「AはBに特徴がある」「AはBを特徴とする」のそれぞれで格助詞が異なるのは、「なる」「ある」「する」のとる格助詞が異なるためである。

②「彼女は料理が得意だ」への方向

「AはBが特技だ」は「BがAの特技（であること）」を基底とする「カキ料理は広島が本場だ」構文だと考えてきた。「AはBが得意だ」の場合はどうであろう。

「得意だ」は形容動詞的な性格が強いため、ふつう「AがBが得意（であること）」という格関係が設定されている。しかし、「BがAの得意（であること）」という関係で捉えることも不可能とは言い切れない。(66)の基底は(67)とも(68)とも考えられるであろう。

(66)　このごろの子どもたちは、歩くことが苦手だ。（『朝日新聞』一九八一・九・八朝一「天声人語」）

(67)　このごろの子どもたちが歩くことが苦手（であること）

(68)　歩くことがこのごろの子どもたちの苦手（であること）

「得意」や「苦手」が形容動詞と名詞の中間の位置にあるのを反映して、「AはBが得意（苦手）だ」という文も①型と②B型の中間にあるのである。

「AはBが特技だ」を中心とすると、その外側に「AはBが得意だ」があり、さらにその外側に「AはBが上手だ」「AはBがうまい」が続いているのである。

③「日本酒はカンをして飲むのが普通だ」への方向

「常」「通例」「きまり」「慣例」「慣わし」といった語は、一見、「カキ料理は広島が本場だ」構文の述語名詞になるように見える。

(69) アトラクションに出演するタレントは、一階の大宴会場の舞台に近い部屋、ホテルで楽屋用と呼んでいる殺風景な部屋を使うのが慣わしであった。（小峰元『ソクラテス最期の弁明』六二）

そのような見方もできないわけではない。しかし、(69)の「慣わし」を「この世界の慣わし」とすることができることから考えて、「アトラクションに出演するタレント」は、直接「慣わし」と関係しているのではなく、「アトラクションに出演するタレントが……使うの」という名詞節の内部にあると考えることもできる。後者の場合、この(69)は第一節の分類では④「この問題は解くのが難しい」型ということになる。

こうして、「常」「通例」「慣わし」といった語が述語名詞に用いられた「～は～が……」構文は、②B「カキ料理は広島が本場だ」型と④「この問題は解くのが難しい」型の中間に位置すると考えられる。

しかし、述語が「普通」「一般的」などになると、「～の普通」という言い方ができない以上、②B型とは考えられず、④型ということになる。

(70) 公営の宿泊施設は、政府の外郭団体や地方自治体が国の補助金をうけて国、公有地に建設し、市長村や公益団体が運営しているのが普通。（『朝日新聞』一九八一・七・一二朝三）

(71)　「だざいふ」の表し方は、現在の町名や天満宮は「太宰府」、歴史上の役所、史跡は「大宰府」とするのが一般的。（『朝日新聞』一九八一・七・一九朝二五「日本史の舞台」）

「普通」や「一般的（に）」は副詞としても用いられる語で、述語として用いられたときにもかなりムード的な性格が強い。

④「彼女に会ったのはその時が最初だった」への方向

最後に、「AはBが最初（最後）だ」型の文に触れておきたい。次のような例である。

(72)　鵜原憲一の文字を禎子が見たのはこれが最初であった。（松本清張『ゼロの焦点』二九）

(73)　「自衛隊は違憲の疑いがある」としたのは四十八年の第十一回党大会が最後。（『朝日新聞』一九八一・九・八朝二）

これらの文は、(74)のような構造を基底とした「カキ料理は広島が本場だ」構文の一種だと一応考えることができる。

(74)　これが鵜原憲一の文字を禎子が見た最初であった（こと）

そのさらに奥には、(75)のような論理関係があるのであろうが。

(75)　このとき初めて禎子が鵜原憲一の文字を見た（こと）

以上のように、「カキ料理は広島が本場だ」構文は、述語名詞が「上手」「必要」「好き」のような形容動詞に近づいていったり、「普通」「最初」のような副詞に近づいていくにつれ、別の構文になっていく。また一方では「象は鼻が長い」型の構文にも近づいていく。

しかし、その間には中間的な段階があるため、「カキ料理は広島が本場だ」構文と他の「〜は〜が……」構文は

連続的である。このような連続性によって、「〜は〜が……」構文は一つの構文パターンとしての統一を保っているのである。

こうして、実際の言語運用の上では、「私はチーズケーキが好物だ」も「私はチーズケーキが好きだ」も同一の構文として意識されている。裏をかえせば、そのような表層パターンに基づく言語運用こそが、言語の運用を容易にしているのであろう。

五　まとめ

本稿で扱った主要な論点を整理しておこう。

①「カキ料理は広島が本場だ」型の文は、「広島がカキ料理の本場（であること）」を基底として、その述語名詞句の名詞修飾要素「カキ料理の」が主題化されてできた文である。

②「カキ料理は広島が本場だ」型の文は、主題である名詞（句）にとっての重要な一側面を叙述する文である。そのため、述語名詞には、「特徴」「中心」「代表」「原因」「目的」などに類する名詞が用いられる。

③「カキ料理は広島が本場だ」型の文は、「AはBに特徴がある」型、「AはBが上手だ」型、「AはBが普通だ」型の文に、その中間段階にある文を介して、つながっている。

（一九八一・九・一〇）

例文出典

『朝日新聞』朝刊一三版（大阪北部版）、夕刊三版、朝日新聞大阪本社
『日本経済新聞』朝刊一二版、日本経済新聞大阪本社
『北国新聞』夕刊七版、北国新聞社、金沢
『毎日新聞』朝刊一四版（摂津版）、夕刊四版、毎日新聞大阪本社
安部公房『砂の女』新潮文庫、一九八一
五木寛之『ゴキブリの歌』新潮文庫、一九七三
工藤宜『佐渡にんげん巡礼』新潮社、一九八〇
黒沼ユリ子『メキシコからの手紙――インディヘナのなかで考えたこと』岩波新書、一九八〇
小峰元『ソクラテス最期の弁明』講談社文庫、一九七六
子安美知子『ミュンヘンの中学生――シュタイナー学校の教室から』朝日新聞社、一九八〇
遠山啓『数学入門（上）』岩波新書、一九五九
朝永振一郎『鏡のなかの世界』みすず書房、一九六五
野々山真輝帆『スペイン内戦――老闘士たちとの対話』講談社現代新書、一九八一
深田祐介『新西洋事情』新潮文庫、一九七七
本多勝一『ルポ短篇集』朝日新聞社、一九八一
松本清張『聞かなかった場所』角川文庫、一九七五
松本清張『ゼロの焦点』新潮文庫、一九七一
柳田邦男『失速・事故の視角』文春文庫、一九八一

注

（1）ここで言う「～は～が……」構文は、「～は」と「～が」が同じ述語に直接支配されているものに限る。したがって、「バルセロナはかってCNTが支配した町である」（野々山真輝帆『スペイン内戦』一四一）のような文は含ま

ない。

なお、「〜は〜が……」構文の分類を行なったものには、森田良行『基礎日本語2』角川書店、一九八〇、八三—八六頁がある。ただし、この分類は本稿で行なった分類と大きく異なる。

(2) 実際、別の新聞では、(5)の「〜は」に当たるところが「〜では」となっていて、(5)の「〜は」が「〜で」から来ていることを裏づけている。

(i)女子二百㍍平泳ぎでは小学生の長崎宏子（秋田AC、川尻小六年）が第一人者の渡辺智恵子（東京SC、文京学園高一年）を抑え優勝した。（『毎日新聞』一九八〇・八・三〇朝一六）

(3) ここで言う②B型の構文に触れているのは、三上章『象は鼻が長い』くろしお出版、一九六〇、第一章7、同「『象ノ鼻』をめぐって」『三上章論文集』くろしお出版、一九七五、二五八—二六五頁、森田良行『基礎日本語2』八四—八五頁などである。しかし、三上は②B型を②A型と区別していないし、森田も②B型については二、三の例文を挙げて簡単に説明しているに過ぎない。

(4) ただし、従属節のなかでは(21)のような語順をとることがある。

(i)また、この地域における潜在的な病気の主な原因が何であるかを調べるために、……（黒沼ユリ子『メキシコからの手紙』一二六）

これは、(ii)のような独立文が従属節にそのまま入り、語順はもとのまま「は」が「が」にかわったものだと考えられる。

(ii)この地域における潜在的な病気の主な原因は何であるか。

(5) 措定と指定については、三上章『現代語法序説』くろしお出版、一九七二、四四—四九頁、同「ハとガの使分け」『三上章論文集』七七頁参照。

(6) (60)は「一〇〇〇円クラスが日当のほとんど（であること）」を基底として派生された「カキ料理は広島が本場だ」型の文であるのに対し、(61)は「日当のほとんどが一〇〇〇円クラス（であること）」を基底として派生された「象は鼻が長い」型の文だと考えられる。

（大学院学生）